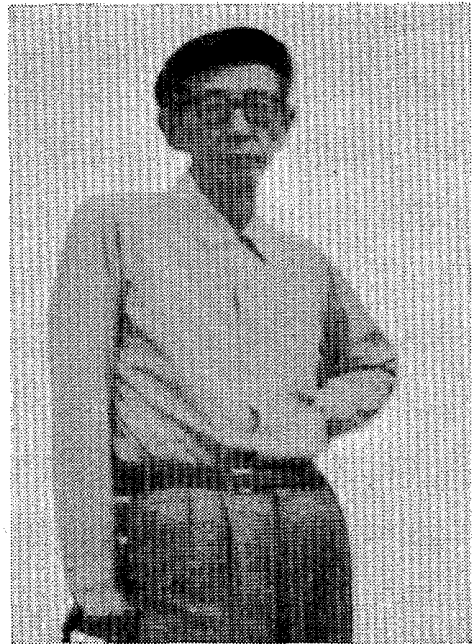


布留先生を偲んで

三 宅 彰



布留武郎教授の元気なお顔をICUのキャンパスでお見受けしなくなったのもついこの間のことのような気がする。しかし、実際にはご闘病のかなりの期間があったので、多少の覚悟はしていたものの、ついに去る1980年4月21日早朝永眠されたとの報を同僚の中野教授より受けたときは、全く感無量であった。

Furu's Survey の名で呼ばれるテレビの子供に及ぼす影響に関する膨大な実証的研究で世界の視聴覚学界にその名を轟かせた布留教授とは知りながら、私にとっては専門違いのためか、学者としての布留先生よりも、かつての学園紛争のときに苦勞を共にした仲間としての布留先生の像の方が強く焼付いていて、未だに消えることがない。

布留教授は1956年以来NHKから転じてICUに奉職されたが、1968年からは教育学科・教育学研究科の科長を務められ、当時私も理学科長として学科長会議の一員に加わっていたが、学園紛争が烈しくなった1969年の5月から8月までの3ヶ月余、当時の学科長団6名が学長職務執行に当るというめぐり合せになり、学科長団内の申合せでは布留教授が議長（学長職務代行）を、私が副議長（学部長職務代行）を務めることになって、それから連日連夜お互いに顔をつき合せて、一方では紛争解決に、他方では日

常業務の処理に当たったものである。学科長団中の年長者としての布留先生は強い責任感に溢れ、大局的な判断が適確で、皆の信望を集め、実際的な細かい作業はわれわれ若輩を信頼してよく任せて下さっていた。紛争処理の細部については各自の意見に違いのある学科長団が、あの困難な時期に3ヶ月余も機能を果し得たのは全く布留先生のリーダーシップに負うものであった。当時学内では何度か押しかけた全共闘の学生達によって室内に罐詰にされたり、またいわゆる大衆団交の場に引出されたりしたが、布留先生は終始毅然とした態度でご自分の信念を強く主張し続けられ、側で私などはらはらすることも何回かあった。学内では余りに学生達の妨害に合うので、会議を布留先生のご自宅で開いたことも数多く、その度毎に友子夫人をはじめ先生のご家族の皆様に大変なご苦勞を強いたことは、誠に申し訳ない次第であった。

紛争に捲き込まれた当時の学生達のみならず、あの時代には教師達もまた、程度の差こそあれ自己の大学観が何程かはぐらついたものであったが、布留先生の立場は極めて明快であり、その主張は当時のわれわれには少々鷹派的に響いたこともあった。しかし、冷静になった現在これを思い返してみると、真に当然すぎる程当然のことを言っておられたのに気付いて、流石に先生はわれわれと違って先を見通しておられた、あるいはもっと正確には、一時的な風潮から物事を見ずに、より長期的な視野から判断しておられたのだと、大いに敬服した次第である。残念ながら、学科長団3ヶ月余の悪戦苦闘も余り報いられることなく、紛争解決にはなお道遠くして学科長団は学長職務執行から下りるはめとなったが、それまでのご苦勞で一時健康を害されたにもかかわらず、布留先生はこの後も1972年3月まで教育学科長を続けられ、同年4月からは大学院教授となられても1974年まで教育学研究科長の職に留まれ、私など陰に陽に先生のご支援・ご鞭撻を頂いたことが忘れられない。1977年に大学院教授を退職された後も、本学客員教授として、ご専門の視聴覚教育を通じ後輩の指導に当られる傍ら、ICUの発展を暖かく見守って下さっていた。

布留教授が1968年から1972年まで所長を兼任しておられた教育研究所に、ご縁あって私もかかわることになった今、専門の学問の世界での尊敬する先達であったばかりでなく、私にとって得難い人生体験を通じての敬愛する先輩でもあった布留先生のことを思い起こし、深い感謝の念と共に今は亡き先生を偲びつつ、ここに謹しんで哀悼の意を表する次第である。